小学校英語の教育法
理論と実践

アレン玉井光江　著

A５判　304pp.
本体2,200円＋税

金森 強

英語教育の根本的な改革を目指して！

平成22年２月12日，中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループにおける審議の中間まとめ」が報告された。３月末頃までには「新指導要録」の公示が行われることになるという。新学習指導要領における学力の要素を反映した形での今回の学習指導要録の改訂では，現行の「目標に準拠した評価」の踏襲と，現行の評価の４観点の枠組みを基盤としつつも，実施観点別学習状況評価の観点の整理が行われるなど，新たな動きも見られる。

小学校における「外国語活動」の評価においては，中学校以降の「外国語科」との接続性に配慮して，「外国語活動」の目標に応じた形で，「言語や文化に関する体験的な理解」，「コミュニケーションを図ろうとする態度」，「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと」についての観点が設定され，今後は，規準例が示され，各行政や学校で参考にされることになる。

今回の改訂において，中学校における授業時数増や高等学校における科目の改編，４技能の総合的かつ統合的な授業実践，英語に関する知識や身に付けたスキルを活用して自らの思いや考えを表現・発信することを進める指導の充実など，日本の英語教育は新たな一歩を歩み始めたと言えそうである。この点において，小学校での週１時間の外国語活動の実施は，現段階では「英語教育」の幹部分にはなり得ず，種を蒔くための土壌作りとしての役割を担っていると言えよう。

本書の著者は，小学校段階における英語教育の充実なしには，日本の英語教育改革は難しいと考えている。その実現のためには，日本の児童を対象にした，理論に基づく指導法や教授法，教材開発こそが求められており，今後の小学校段階における英語教育の明確なビジョンを示すことが必要であるとし，その唯一の実践本として本書を著している。特に，外国語学習におけるリタラシー能力の必要性については，国の方針とは正反対の立場を取り，持論を展開している。

本書は６章構成であるが，各章の〈Glossary〉，〈Discussion〉に加えて，Further Reading も３点付けられており，大学のテキストとして，あるいは，個人で理論的な情報を知るために役立つものと思われる。３章「コミュニケーション活動としてのリスニングとスピーキング」，４章「子どもの外国語学習におけるリタラシー能力の発達」，５章「語彙習得と文法習得」では，具体的な「活動編」が示されており，紹介されている豊富な活動は，「児童英語教育理論」の理解のためだけではなく，現場での指導の際の参考ともなるはずである。

また，「文脈のない，意味のないところで言葉は育たない」「音声言語を育てることの大切さ」「学びを中心とする授業」「子どもたちの学びを中心に考えると日本語が大きな役割を果たしていることにも気づく」「仲間と学びあう教室・学習環境」など，著者の言語観や教育観が随所に著されており，読者の興味を引くところであろう。

６章「子どもの外国語学習の目標，測定，評価」が，他に比べると分量的にも少なく，具体的な評価の観点や規準例等，著者の明確なビジョンが見えにくいのは残念な点ではあるが，全体として，児童期の英語教育を初めて考える方には十分な内容であろう。

高等学校の教員にとっては，小学校における外国語活動はあまり興味のないところかもしれないが，数年後には，小学校で「外国語活動」，中学校で新しい学習指導要領による英語教育を受けた生徒が入学してくることになる。

本書を，「新学習指導要領」，「学習指導要領解説」，小学校外国語活動用教材「英語ノート１・２」「英語ノート指導資料」，「研修ガイドブック」と比較しながら読んでみると，著者の考える理想的な児童期の英語教育と，既に新課程の移行期間に入っている小学校「外国語活動」との違いをはっきりと知ることができるはずである。

（かなもり　つよし・松山大学教授）